

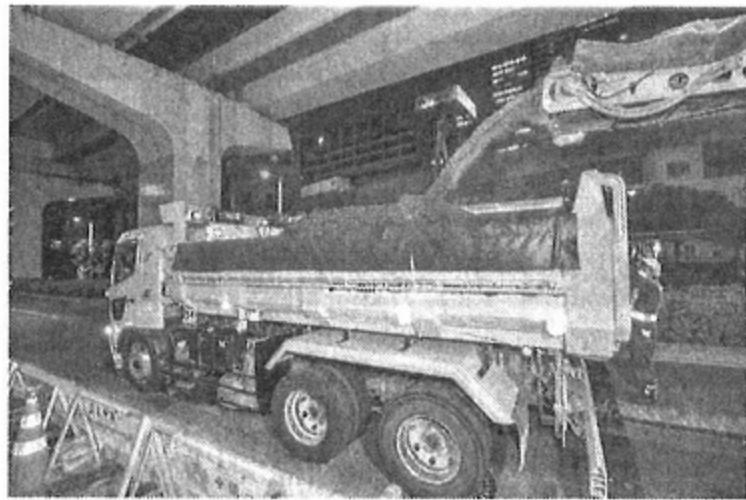
# 積載物重量が一目瞭然

## スケールダンプ 8月末販売へ

### 道路の規制時間短縮に貢献

大煌工業、極東開発  
工業、大林道路

大煌工業、極東開発工業、大林道路の3社は、今夏の市場投入を目指して開発を進めてきた、ダンプに積み込んだ積載物重量をデジタル表示できる「スケールダンプ」のトライアル運行を実施し、結果を公表した。デジタル表示された重量と実際に計測した値との誤差は1.42%～マイナス0.93%内にとどまり、良好な結果が得られた。大きな特長は、道路工事でロードカッターによる積み込み作業など5～8km/時で低速走行しながら揺れる車上で積載物重量を高精度で計測できること。確実な定積載作業、安全運行をサポートするとともに、道路工事に伴う規制時間短縮や、ダンプ運行台数の削減など工事省力化への貢献が期待できる。8月末に販売を開始する。



スケールダンプ

スケールダンプは、ポデーの前側に1点と後側に2点の計3点計に搭載した計量装置(ロードセル)で積載物の重量を計測し、ドライバーと積込業者の双方に分かりやすいようポデー上の外部表示計とキャブ内表示計にデジタル表示する。

ポデー上の外部表示計とキャブ内表示計にデジタル表示する。

トライアル運行は6月19日と20日の両日、大林道路関東支店が施工する東京・港区の「都道新橋日の出ふ頭線(都道481号線)横断歩道移設工

のマーキング作業が不要になる。また、定積載を守りながら車両ごとの積載能力を最大限有効に活用でき、稼働率を向上させて余剰なダンプの運行台数を削減できる。道路規制時間の短縮につながることもできるほか、過積

載に起因する道路損傷や、車両劣化も防ぐことができ、環境負荷の低減にも寄与する。ロードセルは、新車のほか既存の車両にも後付けできる。大煌工業が販売、極東開発工業が生産を担っており、大林道路の濱田道

博副社長は「施工業者として、効率よく工事を進めるため過積載防止について試行錯誤してきた。開発したスケールダンプを全国に広めていきたい」としている。今後、デジタル表示をさらに見やすくするなど改良を加え、8月末から販売を開始する。年間販売台数300台を目指す。

なお、メーカーの極東開発工業は、さらなる精度向上を目指すとともに、作業者が切削中の路面に集中しながらダンプへの積載重量を手元で確認できるようハンディタイプのデジタル表示版を開発するなど、市場の動向に合わせたさまざまな検討を進めていく方針だ。